

男女共同参画推進委員会企画第14回シンポジウム報告

“For Future Leaders in Chemistry for Science, for Society and in the World !”
「社会にはばたく、世界にはばたく、あなたがリーダーになるために」

初めての国際シンポジウム

第94回春季年会3日目、委員会企画の1つとして、男女共同参画シンポジウムが開催された。今回は、2013年のアメリカ化学会（ACS）会長 Marinda Li Wu 氏を招待講演者として迎え、初めての国際シンポジウムの開催となった。前半部は英語での講演であるにもかかわらず、会場は、50名以上の参加者で熱気を帯びていた。

シンポジウム内容

開会挨拶での、玉尾皓平日本化学会会長の「私は、いつも、この男女共同参画活動の best supporter です」という力強い発言に続いて、Wu 氏の招待講演“Partners for Progress and Prosperity: A Personal and Professional Journey”があった。ACS の紹介とともに、世界の化学会会長の多くが女性であることが紹介された。また、自身の経歴の紹介では、「アカデミックではなく企業就職を選択したのは、面白そうだったから」、「Science is Fun!」という会社を設立したのは、小学生の娘が『科学って、つまらないわ』と言ったのがきっかけだなど、聴き手ワクワクするような語り調子で話が進んだ。「研究の分野では様々な視点があることが重要なので、男女共同参画はもちろん、多様な人材が研究を行うことが必要だ」と締めくくられた。次に日本化学会の原田明副会長から、女性化学者奨励賞の第2回受賞者（2013年度）の紹介があり、受賞者である内田さやか氏（東大）並びに牧浦理恵氏（阪府大）から、家庭との両立についての話を交えて、研究内容が

紹介された。

基調講演「IUPAC 国際女性化学賞から見る女性研究者の活躍」は、本委員会の委員長であり、この賞を2013年に受賞した栗原和枝教授（東北大）によって行われた。この賞が2011年の国際化学年に設けられ、その後も継続されているのは、女性化学者が世界的に重要視されていることの証しであり、受賞者は研究と社会活動等に実績がある多彩なプロフィールの化学者であること等が紹介された。続いて、荻野博東北大名誉教授から、「黒田チカ賞の創設—理系女性研究者の育成のために」という特別講演があった。東北大理学研究所、生命科学研究科の博士後期課程の女子学生を対象とした賞の創設（1999年）の経緯とともに、これまでの受賞者の卒業後の追跡調査から、ほとんどの受賞者が教育・研究をはじめとする科学に携わる職業に就いていることがわかり、こうした賞は若い研究者に対して、充実したやりがいを与えるものだと紹介があった。

休憩をはさんで、企業で活躍中の2人の女性からの講演（日本語）があった。2013年に住友化学の理事に就任した関根千津氏からは、「企業で長く働く～“ためらい”から自分を解放しよう～」という題で、男女共同参画や女性の活躍に今必要なのは、「男性や世論全般の意識変革のみではなく女性自身の意識だ」との話があった。今の若い世代は、ノウハウ本や〇〇攻略法がないと不安で、自分と似た条件のロールモデルが歩んだ道と同じ道を進みたがり、様々なチャンスが与えられてもそれを掴まないケースが多いことが紹介された。そして、「あきらめ



Marinda Li Wu 氏の招待講演

るのは何時でもできる。『走りながら考える』ことが良いと思う」というメッセージに繋がった。また、ライオン人事部の稲葉美穂子氏からは、「多様な人材の活躍推進を担当し、進めてきたこと」という講演で、女性社員の方が男性社員より「会社に貢献しているという実感」が少ないという視点での話があった。社員が高いモチベーションを持続できる制度設計や、働き甲斐についての相談センター設置の紹介もあった。長期視点でのキャリアプランを考えることとともに「今、ここで『咲く!』」ことが重要だというメッセージが出された。講演者への質疑応答の後、本委員会担当の加藤昌子日本化学会理事が、講演を振り返って印象深かった点を挙げ閉会の辞を締めくくった。

今後の展開

今回で14回を数える本シンポジウムであるが、ACS 前会長の講演があったことも手伝ってか、多くの聴衆が参加した。今後、本シンポジウムを、女性の活躍推進だけを議論する場としてではなく、男女の多様な人材活躍について共同で参画することの意義について討論する場として発展させていきたい。

〔男女共同参画推進委員会 林ゆう子
（東京工業大学）〕

©2014 The Chemical Society of Japan